

第三章

明大と実業柔道

日本柔道を支える実業団

制づくりに着手し、平成四（一九九二）年のバルセロナ・オリンピックでの正式競技採用前の平成元年に、全日本実業柔道個人選手権大会、平成四年に、全日本実業柔道団体対抗大会がスタートした。全日本実業柔道団体対抗大会の出場チーム数は昭和二十六年に二十二だったものが、昭和四十八年には百七。六十年に六十八と落ち込んだが、平成六（一九九四）年には百五十となり、同十六年には、百一となっている。

全日本実業柔道選手権大会の参加選手数は、昭和六十年に二百二十四人、平成六年のピークで六百三十七人、十六年は五百五十人である。

実業団柔道の出発点は、昭和二十六（一九五二）年四月である。この時に全日本労働者体育連盟柔道部会（全日本実業柔道連盟の前身）が発足し、八月には、第一回全日本実業柔道団体対抗大会が開催された。こうした動きは、戦後復興による需要で好況だった鉄鋼、繊維、石炭、造船などの産業部門に支えられていたが、富士製鉄（現・新日本製鉄）の永野重雄はじめ、戦前の高専柔道で活躍していた人たちが、これら産業部門の会社で活躍するようになっていたことも無関係ではない。

各企業は、復活した学生柔道選手を積極的に勧誘、採用し、実業界に入つた先輩たちの活躍に憧れた後輩が後に続いた。

明大柔道部の例をあげれば、永野重雄に誘われ、富士製鉄（当時）に進んだ金子泰興、曾根康治、神永昭夫、それに続く村井正芳など。村本誠に請われて旭化成に入社した岩崎勇、中野竜登、甲斐福男など。また、姿節雄に求められて日本中央競馬会に入った畠田道夫、関勝治などである。

昭和二十八年、全日本産業柔道連盟が結成されたが、昭和三十七年五月に、上記二組織が一本化され、現在の全日本実業柔道連盟となり今日に至る。

この間、産業構造の変遷につれ、参加企業の盛衰はあつたが、実業団柔道

全体としては発展を続け、同時に、実業柔道のレベルも大幅に上がり、学生柔道、警察柔道と並んで日本柔道を支える大きな柱となつた。女子柔道については、神永昭夫理事長時代からいち早く、実業団としての強化、育成の体

平成十六年のアテネ・オリンピックには、上村春樹団長以下役員四名、鈴木桂治以下選手十一名が実業柔道界から出場、金メダル七、銀メダル一を得た。

平成十七年一月、全日本実業柔道連盟所属選手のアテネ・オリンピック大会メダリスト表彰の際に、来賓の全日本柔道連盟の嘉納行光会長が、「日本の実業団は世界に類を見ない組織である。アテネ・オリンピック大会における実業団の選手の活躍はじめ、日本柔道の発展に大きな貢献（をしている）。経営トップはじめ関係者に改めて心から感謝とお礼を申しあげる」と祝辞を述べた。実業柔道の果たすべき役割は、ますます重要になっている。

以下に、全日本柔道連盟発足以来の会長、理事長、実業団の強豪チームに入つた主な明大選手の名を掲げておく。

連盟発展の功労者

昭和三十七（一九六二）年五月、全日本実業柔道連盟が発足、初代会長に永野重雄（富士製鉄社長）が就任。以降、宮崎輝（旭化成工業会長）、齋藤裕（新日本製鉄社長）、山口信夫（旭化成工業会長）と、財界のリーダーに

引き継がれて今日に至る。

歴代会長を補佐する理事長には、青木直行（日本織維連盟理事長）、早川勝（日本経済団体連合会専務理事）、村本誠（旭化成工業副社長、のち太平工業社長）が就任し、今日に至る。

（文責・村井正芳）

企業柔道部と明大選手

新日本製鉄（優勝29回）

金子泰興	曾根康治	末木茂	神永昭夫	朝田紀明	神屋興介	村井正芳
北瀬暁一	篠巻政利	須磨周司	岩田久和	鮫島俊隆	原吉実	丸谷武久
栗原三千男	藤原敬生	壇上治了	石田輝也	吉田秀彦	落合平吉	

旭化成工業（優勝8回）

岩崎勇	中野竜登	甲斐福男	重松征成	神永正夫	栗原英道	佐藤幸二
坂口征二	飛鳥義紘	上野武則	山本裕洋	佐々木教善	（国安均）	
梶原博実	上村春樹	薦田茂久	田中弘一	中野博之		

日本中央競馬会（優勝1回）

姿節雄	畠田道夫	関勝治	姿信夫	鳥海又八郎	稻田（福沢）寿朗	
近藤右一	岩田克之	薦田文明	中村正浩	工藤禎康	小林誉	小川直也
秀島大介	大瀧賢治	松本昌弘	佐々木信也	畠田勝一郎	猿渡琢海	

博報堂（旧）（優勝2回）

新井康之 金丸国一 山口友孝 宮崎敬一 田中章雄 大林真人

池田健二 鳥海又五郎 佐々木満 湯浅政一 石橋重則 重松義成
加茂博久仁 吉永浩一

京葉ガス（優勝2回）

宮下潔	鳥海又五郎	石井茂雄	市原弘一	大村将司	加瀬次郎	諏訪剛
柳田昭雄	佐藤英彦	長谷川敦	吉永喜史	中浜真吾	古賀崇裕	
田中和美						

倉敷レイヨン（旧）（優勝2回）

徳永三幸 小林昇 佐藤治 菅原隆三郎 安斎奏人

三菱重工（優勝1回）

中村博之

日本鋼管（旧）（優勝1回）

渡辺政雄

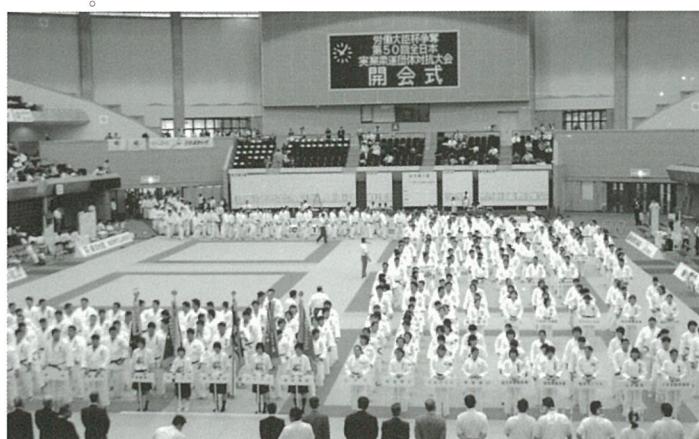
三菱レイヨン

山尾英三 徳山操 中谷雄英

王子製紙

田村興靖 植草（積田）勝

注・優勝回数は全日本実業柔道団体対抗第一部優勝で一九五二年から二〇〇四年まで。
新日本製鉄は、八幡製鉄、富士製鉄を含む。



第50回全日本実業柔道
団体対抗大会の盛況

実業柔道の発展に大きな役割



阿南惟正
全日本実業柔道連盟
副会長兼理事長

私が小学校時代、最初に柔道の手ほどきを受けたのは、武藏野市の鈴木柔道であります。恩師の鈴木潔治先生は三船久蔵先生の門下で、学習院や駒澤大学の師範をされていました。昭和初期、明柔会の結成に尽力されたとも聞いています。きわめて温厚な先生でしたが、稽古が終わると「精力善用、自他共栄の精神」、「柔道は礼に始まり、礼に終わる」、「常に質実剛健である」という事を私達に説いて頂きました。子供の頃の、このようなしつけの大しさを、自分が歳を取るにつれ、強く感じています。

姿節雄先生にも指導して頂きました。昭和三十（一九五五）年前後、東大柔道部は清水正一先生を師範として、本郷七徳堂や、駒場の道場で練習していましたが、しばしば講道館に行き、

他大学の猛者達と稽古をしました。水道橋の駅前の道場です。この頃、姿先生に何回か厳しい稽古をつけて頂きました。数年前、吉田秀彦監督当时、彼に誘われて明大の道場を訪ねたら、寒稽古の雪の降る朝、先生が練習をされていたのに感動しました。その時、指導して頂いたのは強い想い出として残っています。

私が明治大学柔道部の試合を初めて見たのは昭和二十七（一九五二）年九月、戦後第一回の全日本学生柔道大会が藏前国技館で行われた時でした。私はその年、東大に入学し、柔道部に籍をおいていました。戦後、長い間、占領軍によつて禁止されていた大学柔道が再開した時でしたが、全試合を通して無失点で優勝した当時の明治大学の圧倒的な強さは、きわめて印象的でした。

連盟に改組されます。

この二つの流れが、昭和三十七年に一本化され設立されたのが、現在の「全日本実業柔道連盟」であります。初代会長は永野重雄氏（富士製鉄社長）が選出され、二十二年統率された後、お付き合いする事になりました。

末木茂さんも富士製鉄に入社されましたが、昭和三十年夏、東大柔道部が初めて地方遠征をして、北海道各地を回つて最後に室蘭で試合をした時、一夜歓待されましたが、座布団を十枚近く重ねた上に座つて落語を聞かされ、リラック

スした想い出があります。

このように、当時の各大学柔道部の出身者が企業に身を投じたについては、戦後の実業柔道界の動きが大きく影響しています。

戦後の実業柔道界には二つの流れがありました。第一は、東では東芝、日本鋼管等、西では南海電鉄、東洋レーヨン等が中心となって結成された「全日本勤労者体育連盟柔道部会」であり、昭和二十六年、第一回労働大臣杯争奪の大會が開催され、二十二チームが参加しました。この組織は昭和三十五年に、全日本実業団柔道連盟に改組されました。

第二は、産業柔道の動きで、昭和二十八年には、昭和四十五（一九七〇）年、両社が合併してできた新日本製鉄で、同じ会社の社員として、山口信夫氏（旭化成）と続いています。この歴代会長を支えた理事長は青木直行氏（織維）、早川勝氏（石炭連盟一日経連）、村本誠氏（旭化成）ですが、昭和五十八年には神永昭夫氏（新日本製鉄）が引き継ぎました。

この全体の経緯を見ると、戦後の実業柔道界

を形成して行つた経営者の多くは、かつての高専柔道大会を戦つた経験者であります。上述の永野、青木、早川各氏は六高出身、村本氏、宮崎氏は五高、齋藤氏は東京商大予科であります。この外にもそのような経験を持つた人々が、戦後柔道復活のため柔道に理解を示し、企業に柔道部を造り、有力な学生を入社させた事が大きく貢献しています。

以後、全日本実業柔道連盟は発展をとげ、現在加盟企業約二百社、平成十六（二〇〇四）年の団体対抗に出場したチーム数は百一、個人選手権への参加者は五百五十名を超え、アテネ・オリンピックにも、一四選手中一一名を送つています。

このように実業柔道が発展して行つた中で、明大出身者の果たした役割はきわめて大きく、新日鉄、旭化成、日本中央競馬会、博報堂、京葉ガス、クラレ等の強化に大きく貢献しています。選手としてのみでなく、指導者として果たして来た役割も大きなものがあります。

その中でも、すぐれて偉大な存在だったのは、やはり神永昭夫氏でした。

平成二年頃、神永氏から実柔連の副会長就任を依頼され、共々その発展に尽くそうと思つて承諾して間もなく、平成五年春、彼は急逝しま

した。彼の後任の理事長をショートリリーフと

いう事で受けつぎましたが、思いもよらず十二年間務める事になりました。神永氏の遺志を生かすべく、組織運営体制の確立、財政の強化、選手の育成強化と、基盤の拡大を目指して来たつもりでありますが、これも、甲斐、宮下、村井、関、上村、諏訪等、多くの明大出身の人材に支えられて来たおかげと思つて居ります。

アテネ・オリンピックにおける柔道の成果は全日本を感動させました。これは選手達が正々堂々と一本を取る柔道に徹した健闘の賜と思いますが、同時に、指導陣の適切にして厳格な指導があずかつて大きかつたと思います。その指導陣の顔ぶれを見れば、神永氏が将来を期待して鍛えぬいた人々であります。

実業柔道は先に述べたように発展を続け、警察柔道と共に日本柔道を支えて来ましたが、時代の変化と共に環境は変わりつつあります。産業の盛衰の中で、企業スポーツ全体のあり方も大きな課題に直面しています。私共としては、新しい感覚で、世界の中における日本柔道、それを支える実業柔道を考えて行かねばなりません。

このように実業柔道が発展して行つた中で、明大出身者の果たした役割はきわめて大きく、新日鉄は、前身の日鉄そして八幡・富士の時代を通じて、企業スポーツの一方の雄であった。もちろん、現在もそうである。たとえば――。

実業団水泳における八幡チーム、サッカーの八幡、実業団柔道の広畑、バレーの堺、ラグビーの釜石・八幡、陸上の八幡、そして野球の都市対抗には必ずいくつかの製鉄所チームが登場する。アメリカンフットボールやスキーナビゲーション等のスポーツといつた若干の例外を除けば、新日鉄のスポーツ活動はあらゆる分野に及んでいます。

当然ながらそこには、栄光の名選手がいる。彼らをいちいち列記していくたら、たちまち数百ページにわたってしまうだろう。企業におけるスポーツマンとその人生の軌跡を探るのに、新

新日鉄の名選手たち

評論家 岩井正和

サラリーマン柔道家の道をひらく・曾根康治

企業スポーツの雄

日本のスポーツ界は企業と学生が主軸であることはいうまでもないが、そのなかにあって新日鉄は、前身の日鉄そして八幡・富士の時代を通じて、企業スポーツの一方の雄であった。もちろん、現在もそうである。たとえば――。

当然ながらそこには、栄光の名選手がいる。彼らをいちいち列記していくなら、たちまち数百ページにわたってしまうだろう。企業におけるスポーツマンとその人生の軌跡を探るのに、新



曾根康治

日鉄の人々を選んで異論を唱える向きはまずあるまい。

選手生活は短い。スポーツをやっている間は華やかな脚光を浴びても、現役を引退した後は、ごく普通のビジネスマン人生を送らなければならぬ。

「スポーツマンとビジネスマン人生を

どう両立させるか」

書けばたつた一行だが、その実、本人にとつてこれほど難しいテーマはない。ことに、彼らの属する企業が大きければ大きいほど、そしてスポーツマンとしての彼らの栄光が大きければ大きいほど、そのハードルは高くなる。だが、それを越えてこそ本物である。

柔道から得た人生観

「野球と柔道と違つても、曲がりなりにも一流の域に達したといわれる人には少なくとも三つの長所がある。私のことはさておき、（企業人として成功するスポーツマンは）それを存分

に生かしているからではないだろうか」

岩手県釜石市——。一昨年来、『合理化』の

波に揺れるカマイシのその震源地？新日鉄釜石製鉄所業務部長室で、室の主はそう言つ。

空前の構造大不況といわれたこの数年の鉄鋼業界——新日鉄が企業百年の大計として、全国九製鉄所の見直しと合理化の推進に踏み切ったのは周知の通り。釜石はなかでもショック度の大きい『減量計画』に直面している。

すでに相次ぐ配転、出向、操業縮小で釜石の人口は急減し、いまでは宮古に抜かれて岩手県の第三位。今春三月（記事の当時一九八〇年）に予定されている大型鋼材工場の休止、それに伴う約五人の君津製鉄所配転と、この町にとって暗い話題で、なんとなく全体的に沈滞ムード。そういう雰囲気——非常事態のなかで、関連企業の『減量』指揮に当たるのが業務部長のいま、当面する大きな仕事である。

決して心弾むことではあるまい。だが、当の業務部長は所内の安全監視パトロール帰りの姿のままで、『楽観的』にこう言う。

「三つの長所、言い換えれば、スポーツを通じて会得した人生観ということですが、まず自分に勝つ心、機敏な判断力、そして組織大事

にする気持ちがそれぞれあれば、たいていの問題はかたづくのではないでしょうか」

柔道の曾根康治。昭和三（一九二八）年十一月十四日生まれ。今年五十二歳になる。

学生柔道の復活は昭和二十六年。翌昭和二十七年全日本学生柔道大会で初優勝した明治大学

の主将。以降、四連勝して明大柔道部の黄金期を築く大きな原動力となつた。その年の第二回全日本学生柔道選手権大会で関西大学の一ノ瀬泰男四段を破つて初の個人タイトルを取る。

さらに昭和三十三年。全日本柔道選手権大会で山舗公義六段に勝つて初優勝。その勢いを駆つて第二回世界選手権でもチャンピオンになつた。まだ体重別という制度のない時代で、そのころはあのオランダの巨人ヘーシンクも日本柔道の敵ではなく、四回戦で敗退している。

明治大学監督、日本代表チームのコーチと監督、富士製鉄監督を経験したが、指導者としては後出の同じ新日鉄・神永昭夫を育てたことで知られる。だが、その曾根もいまや柔道とはすつかり縁を切つて『新日鉄のソネ』。仕事一筋である。

武道精神の名残

ただし、柔道と離れても、柔道で得たものは身にしみついている。

もともと曾根は、柔道の『申し子』である。生地の埼玉県寄居町は、秩父の剣道（甲源一

刀流により代表される) に対して柔道で知られる。

加えて叔父・幸蔵は警視庁師範で昭和十年代の日本十傑に挙げられるほどの強豪(九段)。三十五歳で死んだ父徳治も六段。戦死した長兄は十八歳で四段、残る弟妹も、男はむろん、妹も女子柔道という言葉もなかったのに、女だてらに道場に通つた――。

「兄が生きていれば剣道に進んだ」(曾根)

かもしれないなかつた曾根だが、ともあれ、小学校一年から柔道着の汗と畳の匂いをかぎながら育つ。戦後、まだ学生柔道は禁止されたままだつ。戦後、まだ柔道やりたさに明治へ入る。

監督は葉山三郎。師範は姿節雄。とともに戦前・戦後を通じ、柔道家・柔道指導者として知られている。

「だがご承知のようにG H Q(連合国総司令部)には逆らえない。明治では、『第二レスリング場』の看板を出してこつそり柔道部が生き延びていた」(曾根)

息を吹き返したのは前述のように昭和二十六年。曾根にとつて学生生活も終わりに近かつた。たまっていたものが一挙に噴き出した。

翌二十七年。石橋毅次郎、河辺一彦、山尾英三、末木茂、大野忠博、門屋賢悟といった猛者

を率いた曾根の明治は、まさに疾風枯葉をまくに似た強さを發揮した。全試合七一一〇の完全独

走だつた。

のち、「この初優勝の明大陣は、二十年後の本年(四十七年)同大会優勝の明大チームと比べてもずっと強力だった。まさに驚異といつてもよい」と書かれたのも当然である。

しかし、曾根に言わせると、彼の個人優勝とともに、それはあくまで“結果”にすぎないことになる。

「いまではカゲが薄くなつてしまつたが、私たちの時代はまだ武道精神というものがあつた。耐えることで精神力を強くする。技術はそのあとについてくると教えられた。もちろん礼に始まって礼に終わる、と徹底して叩き込まれたが、なによりも自分の弱さに打ち勝つことが大事だ」と言われてきた

不思議なもので、そういう環境にあると、人は自然に、より強くなろうとして、自らやるべきことを探し求めて一層“修業”に励むものだと曾根はいう。

個性と全体のバランス

「精力善用・自他共栄」——喜納治五郎の講

道館柔道の基礎理念である。

曾根にとつてもまた、あの明治の猛者連を一つにまとめて栄光への道を突つ走つたとき以来、一刻も念頭を離れない言葉である。

当時の明大柔道部員は数十人にのぼつた。み

んな個性的であった。だが、個人競技であれ団体競技であれ、少なくとも団体生活のなかでは、唯我独尊は許されない。個性を伸ばしながら全員のバランスを図る——それは指導者の役割であるが、同時に主将の仕事でもあつた。

さいわい曾根にとって、葉山も姿も、まれにみる好指導者であつた。「技術よりも人間の道」——換言すれば、与えられた課題に最善を尽くすのが人なのだと教えられた。それは、“柔道の曾根”として、いずれ接することになる永野重雄、安西浩、武田豊、大内俊司らからも聞くことになる。

昭和二十八年、明治を卒業した曾根は、叔父幸蔵九段のよう柔道専門家として立つか、企業のサラリーマンになるか——二つに一つを選ぶのに悩む。

結局、富士製鉄志望に踏み切つたのは、

「柔道で体得したものは一般社会でも立派に通用する」(曾根)という自信があつたからだ。もちろん“柔道”的看板が光つている。

サラリーマンとスポーツマンの両立。

八幡製鉄に入った野球の福島一雄も初めは悩んだというが、曾根もまたその可否を思いあぐねる。二人に共通するのは、割り切りの見事さだろう。代弁して曾根が語る。

「柔道が私を必要とする間は、柔道に徹しま
した」

少なくとも柔道において、曾根のような第一
線の現役選手がサラリーマンになり、日本選手
権のような大会に出ることは、戦前の満鉄のよ
うな特殊ケースを除いてはほとんどありえなか
つた。曾根の富士製鉄入りは、その意味で柔道
界注目の的であつた。

サラリーマンになり、かつ“柔道に徹した”
曾根は、昭和三十六年、第三回世界選手権大会
でヘーシンクに敗れるまでの八年間、日本柔道
専門家や追随する古賀、神永、猪熊らに対して
のその戦績は、曾根なりに出し始めた一つの確か
な解答であったといえる。

『鑄物の曾根』への変身

昭和三十九年の東京オリンピックにコーチと
して、四十年の第四回世界選手権大会に監督と
して、それぞれ参加した曾根は、三十七年以来
続けてきた母校・明治の監督も四十三年に神永
にバトンタッチ——よいよ、社務への全面切り
換えに踏み切ることになる。

三十七年に、本社労働部厚生課掛長の肩書が
ついたが、オリンピックに専念のため一時返上

を申し出て、社内外に“物議”をかもしたのも
曾根らしいが、以後の精励ぶりも瞠目に値する。
オリンピックが終わって“復帰”した曾根は

申し出て市場開発部広告宣伝課に第一掛長とし
て配属される。

「実際問題として当時、富士製鉄の製品につ
いてロクな知識がなかった」（曾根）のを補う
ためである。足かけ一年半。課長補佐に昇進し
たのはその間だが、四十一年一月、販売部銑鉄
課長補佐に転じてからが真骨頂、見せ場の始ま
りだつた。

扱つたのは銘物銑だが、八幡・富士が合併し
て新日鉄となつた翌年の四十六年に、空前の銘
物銑不足騒ぎが起きて、それが曾根の存在——柔
道ではなく“鑄物の曾根”的名を業界関係者に
深く刻みつけるに至るのだ。

「緊急出荷の要請が昼夜を問わず殺到する。

需要家の実情から緩急を見て指令を出し、なん

とか川口や北陸の業者の非常事態は回避できま
した」と言えるのは、曾根自身“銑鉄の販売”
という実務に精通していなければかなわぬこと
だつたろう。改めて問い合わせると、

「日ごろ築きあげた信頼関係のおかげです」

とだけしか曾根は語らないのだが、少なくとも
柔道のソネに安住していく是不可能だった
ことは確かだらう。四十九年、曾根は条鋼販売

部副部長に任じられた。そして五十四年六月、
釜鉄の業務部長として久し振りに本社を離れ
る。

柔道歴での曾根の思い出は、数多くの強敵に
あたり、一度は負けても二度目は必ず勝つたこ
と——ヘーシンクは例外だが、“創意工夫”で
は人後に落ちない自負はそこから生まれた。

「苦しいときに苦しい顔をするな。涙を出す
ためである。足かけ一年半。課長補佐に昇進し
たのはその間だが、四十一年一月、販売部銑鉄
課長補佐に転じてからが真骨頂、見せ場の始ま
りだ」

と、いま曾根は、眼鏡を光らせながら入れ代
わり立ち代わり部長室を訪れる関連企業の経営
者に語りかける。

自分との戦いに克つ・神永昭夫

童顔の庶務課長

「個性の強さを周囲はどう調和させるか——結
局、企業のみならず、世間一般に入つて人間ら
しく生きるためにには、それが一つの大きなカギ
ですね」

東京大手町の新日鉄本社十八階。窓外に冬の
日ざしを見ながら総務部庶務課長・神永昭夫が
言う。

分厚い眼鏡。まだ童顔に近い(?)顔。体格



神永昭夫

抜群を別にすれば、その柔軟な容貌からは“柔道の神永”を連想するのは難しい。

神永が曾根康治の後輩で、長い間、日本柔道の“金看板”であったことは改めて紹介するまでもあるまい。しかし、その神永も、先輩同様、企業ビジネスのなかにいまや見事に生きる。

昭和四十四（一九六九）年。第六回世界選手権大会の日本チーム監督として、六階級独占優勝を果たしたあと、四十七年まで、母校明治の監督を務めたのを最後に、曾根を見習つて柔道界の表舞台から姿を消した（現在、学生柔道連盟副理事長、日本柔道連盟審議員）。人事部保険掛長を経て、合併後の厚生課保険掛長。四十八年、建材販売部建築加工製品課長。五十一年、現職。社務中心の連日。

昭和十一年十二月二十二日生まれの神永が、柔道を始めたのは宮城県東北高校一年生のときである。小学校一年からの曾根に比べるとひどく遅いが、終戦後という特殊環境を考えれば不思議ではあるまい。スタートは遅れたが後は速

い。

その後、創立されたばかりの東北柔道専門学校で、桐原智譲という先生に手ほどきを受けた神永はたちまち上達した。

「格別な動機はない。単純に強いものに憧れただけだ」（神永）と言うが、天賦の才に努力が結びついた、つまりは精進のおかげだろう。

三年生の夏。仙台で開かれた宮城県高校個人

選手権大会に初優勝する。その年の秋には、講道館の秋季紅白試合で十九人抜き。異例の二段跳びで初段から三段へ——以来、明治に進んで学生チャンピオン一回、富士製鉄に入つて全日本三回、オリンピック代表一回、世界選手権代表二回等……。

その神永も眼鏡をかけていては通用しない。

こんなエピソードがある。あるとき、北海道室蘭に行き、夜の町に繰り出した。巨体はひときわ目立つたが、何分にも地元に馴染みはない。結局、柔道の神永と言い当てたのは、ちょうど眼鏡を外した素顔を見て、東京オリンピックのテレビ画面——ヘーシングとの対戦の最後の瞬間を思い出したおでん屋の老女だけだったといふのだ。

もちろん、それと神永自身との間に特別な意味があるわけではない。むしろ、“柔道の神永”からの転身をストレートに反映するというべき

であろう。

その神永がいま、“個性と調和”を言う。

練習を創造する

「仕事でも柔道でも要は妥協したらダメでしょう。より激しく自分との戦いにわれを鞭うつ——目標を設定し、達成するための方法論を策定し、忠実に一つ一つ実行するのが、何事によらず、最短距離ではないでしょうか」（神永）

“サラリーマン柔道家”的道をひらいたのは曾根、より厳密にいえば、その一年先輩で戦後第一回の全日本学生柔道選手権の優勝者金子泰興の富士製鉄入りだが、金子はその後、第一線を退いた。

逆説的にいえば、前に述べたように、それだけサラリーマン柔道を歩むのは難事なのだが、再述はすまい。ただし曾根も神永も、ほぼ全うした。柔道界の先輩の間には、そのこと自体、日本柔道の地盤沈下、衰退の証明と論ずる声があるが、それは曾根や神永の責任ではない。

曾根は十年、神永は七年。その主要な戦歴はすでに触れた。

「タイトルを取るより、ホルダーであることのほうが大変です。そのためには人目に触れない練習を重ねた。長かった……」（神永）

練習時間はむろん、専門家や学生には遠く及

ばない。『中身の濃い』練習を自分で工夫するしかなかつた。

「柔道を始めて以来、いつもこれは自分のため、を第一義にしてきた。結果がよければ、学校や会社の栄誉につながる。まず、そのためには、自分が体力、能力の限界に挑戦することだ、と思い定めてきたから、別に苦しいとは思わなかつた。むしろ、苦しさを求めるのが楽しみに転ずるようになった」（神永）

キザにいえば、技にしろ筋力にしろ、創造する喜び』を存分に味わつた、ともいう。問題は、そうした『強さ』を、どう調和という発想とバランスさせるかである。

妥協を許さない——だけでも、少なくとも日本においては周囲とぶつかる。自分の目標を貫徹するがんばれば、すでに破綻はそこにある。神永もそれは認める。だが、直ちにこう言い添える。

「柔道も、稽古はともかく、ひとりでは柔道にならないことを知るなら、道は自ずからひらけてくる」

現在の庶務課長というポストは、平たくいえば総会屋——一口株主が相手。だが、相手の是非は別として、神永の評判はめっぽうよいと聞く。

「どんな立場であれ、つねに一個の人間とし

て同等に接する」（神永）と聞けば、なるほどそれも道理と思えるのである。

注・『プレジデント』（一九八〇年二月号）より転載。

実業柔道の現状

全日本実業柔道連盟事務局長 村井正芳

（聞き手 橋本敏明）



学生界の有力選手入社でレベルアップ

橋本 まず最初に、実業柔道の現況と特徴についてお聞かせ下さい。

村井 現在の実業柔道連盟の出発点は、昭和二十六（一九五二）年四月です。当時は戦後禁止されていた学校柔道も復活し、柔道を早くやりたいという愛好者が大勢おり、そういう方々が自主的に練習場を作ったり、また練習場を探して、会社や公共施設で練習を行つたようです。昭和二十六年八月には第一回全日本実業柔道団体対抗大会が開催されております。

現在、連盟の大会は、団体戦の「全日本実業柔道団体対抗大会」、個人戦の「全日本実業柔

道個人選手権大会」、それから鉄鋼、織維など、業種別に選手を選抜して行う団体戦の「全日本産業別柔道大会」の三つがあります。加えて海外派遣事業もあります。（中略）

海外派遣では、単に試合を行うだけでなく、実業人としての素養、見聞を広げようという気組みながら今日に至っています。

持ちがあります。

この他に、連盟活性化の目玉として昭和六十年に、当時の神永昭夫理事長が運営委員会を発足させまして、この委員の方々が活性化に取り組みながら今日に至っています。

実業柔道の特徴の一つは、例えは産業別大会に見られるとおり、世相、経済状況を反映しながら発展していることです。この大会は、戦後、復興建設による需要で好況だった鉄鋼、織維、炭鉱、造船などの産業部門でスタートしたのですが、産業の変遷につれて、炭鉱や造船が消え、それに代わるように情報や警備などが新たに加わっています。実業団と一口に言つても、中身は変化しているということですね。

主要大会の動向ですが、ここ数年、大変な伸びを示しています。団体対抗戦では、昭和二十六（一九五一）年の二二チームが平成六（一九九四）年には一五〇チームに増え、それから昭和四十六（一九七一）年に、わずか一五五名でスタートした個人戦は、平成六年の実績では六

三七名と、大変な成長を遂げています。産業別大会も、最初、六チーム・一部制で行っていますが、チームが段々増えてきまして、現在では二部制で部門を分けて行うほどになります。

この急激な進展の原因ですが、これは、経界の発展に伴い、大学出の優秀な柔道選手が、卒業後に実業団に入るケースが増えてきた結果ではないかと思います。従来、柔道を行つていなかつた企業が社業の発展に伴い、社員として柔道選手を確保して参加する。また従来からの企業は、さらに戦力を強化して参加する。バブル期の経済の影響で、求人が非常に多かつたということでしょうか。

大学のレギュラーが実業団に入つてきて、チーム数や参加人数が増えただけでなく、レベルが急速に上がつてきました。

仕事でも頑張る、という気持ちが大切

橋本 実業柔道の隆盛は景気の動向と関係があるというお話は、大変興味深いものがあります。ところで、柔道界全体の動向で見逃せないのは女子柔道だと思います。実業柔道でも、女子柔道に熱心な会社が見受けられますね。

村井 神永理事長が、やはり女子の強化について大変熱心な考え方を持つておられました。平

成四（一九九二）年のバルセロナ五輪で正式な種目となつた女子柔道育成のため、企業柔道部と、選手数が少ない時期から団体戦を創設し、個人戦も変則的ではありました、体重別を導入して実業団としての受け皿を用意したのです。

当初は、学生柔道の受け皿として発展していましたと思します。平成四（一九九二）年以降、ミキハウス、コマツ、住友海上など、次々と女子柔道チームが出来てきました。現在では、取り組む会社も増えて選手層も厚くなってきたと言えます。

橋本 受け皿があるということは、選手にとっては心強いですね。お話をとおり、大学出の優秀な選手が各会社に入つてきます。選手として年齢的にも総仕上げの時期にあたりますが、そういう時期に、仕事と稽古を両立させるのは大変だろうと思うんです。会社の仕事をこなし

ながら、厳しい稽古を続けていくわけですが、この場合、社会人として大切なことは、どんな点でしょうか。村井さんは全日本選手権で活躍された経験をお持ちですし、ご自身の体験から後輩へのアドバイスをお願いします。

橋本 最近、大会会場でよく見かけますが、実業柔道の選手が登場しますと、社員の方が、特に女性の方々が盛んに応援されていますね。村井 そうですね。最近は応援が盛んになりました。道路公団やコマツさんなどは、全國的な応援をしようということで、地方での大会でも大勢の応援が繰り出します。したがって、大会の運営もカラフルにしたり、スマートにしたり、工夫されてきました。またそのよう

に変わっていくと、女性ファンも増えるのではないかと思います。会場内で柔道着のズボンを履きかえたり、弁当を食べたりすることも、

間はウエートを柔道に置いてもらう。その時期は道場で稽古、畠を降りた後は、会社という道場に変わりますけれども、そこで頑張ろうという気持ちが大切です。嘉納治五郎師範が言われた「精力善用、自他共栄」の精神ですね。いろいろな会社で、幹部に昇進されて重要な仕事を任されている方が沢山いらっしゃいますよ。

実際の仕事において、一番不足しているのが

仕事上の知識ですが、それは選手を辞めた後でも、十分に努力すればある程度のところまで挽回できると思います。その他のことでは、柔道を通じて学んだ礼法、長年にわたつて培つた柔道人脈など、営業面ではかなり役に立つたと思っています。

橋本 最近、大会会場でよく見かけますが、実業柔道の選手が登場しますと、社員の方が、特に女性の方々が盛んに応援されていますね。

村井 そうですね。最近は応援が盛んになつ

てきました。道路公団やコマツさんなどは、全国的な応援をしようということで、地方での大会でも大勢の応援が繰り出します。したがって、大会の運営もカラフルにしたり、スマートにしたり、工夫されてきました。またそのよう

少しずつ改善していきたいと考えています。そういう積み重ねが、柔道の価値を高めていくことではないかと思います。

アマチュアの企業スポーツは曲がり角

橋本 日本経済は、今、非常に厳しい状況です。先ほどのお話では、景気の動向が実業柔道の推移に現れているということですが、例えば大会への参加者数は、まだまだ伸びる可能性があるのでしょうか。今後の展望について、いかがお考えでしょうか。

村井 大体、トップに来ているのではないかと思います。景気の影響ですけれども、バブル崩壊と円高の進行によって輸出産業が非常に痛手を蒙っています。したがって、自動車や電機など、厳しいリストラを行っています。運動選手も例外ではないでしょう。そういう意味では、景気の変動をまともに受けてくるのではないかと思うんです。

ただ柔道は、基本的に道場と柔道着があればいいので、会社に対し極端な負担はかけないと思います。実業柔道の場合は、オリンピックや世界選手権を目指すチャンピオンスポーツの面と、企業に勤めながら好きな柔道を愛好する面があります。チャンピオンスポーツの人々はごく一部であって、それらを支える人々が多い

わけです。チャンピオンスポーツでは、合宿、遠征、大会派遣などでそれなりの経費がかかります、支える側の人たちは経費もかかります。そんなに影響はないと思います。しかし、世界のトップを目指す選手をどれだけ抱えられるかということになると、やはり影響があるのではないしょうか。

企業は経済を敏感に反映している生き物です

から、状況によつてかなりの変化を迫られるようなところがあります。柔道で世界各国の選手が強くなれば、日本も努力しなければ勝てない、それと同じです。経済環境が厳しくなれば、会社に在籍している以上、そのしわ寄せは来ます。ですから個人にも頑張つてもらわなければいけない。

二つ目は、やはり人材だと思います。われわれ実業人は社内で厳しい議論を繰り返し、お互いの理解を深めます。柔道界においては、議論の意味合いを理解してもらえないで、相手を見て言い方を変えたり、内容を少し後退させて話をせざるを得ない面があります。

高い目標を掲げて、それを目指すときには、当然苦しいことがあります。当事者はじめ関係者が困難に打ち勝ち、目標を実現する決意をもつて取り組んでいけば、もつともっとよくなれると思います。注・『月刊武道』一九九六年一月号より転載。

ソウル・オリンピックで日本柔道は惨敗（金メダル二）しましたが、その後、バルセロナ（金メダル二）、アトランタ（金メダル三）、シドニー（金メダル四）を経てアテネ（金メダル八）で復活しました。

連盟は、日本柔道の発展に果たすべき役割を自覚し、日本柔道の復活に貢献しています。

いう状況を踏まえて、柔道界全体のことに対しで、ご提言があればお願ひします。

村井 一番心配されるのは財務基盤です。どう

うにして必要な財源を確保していくか。スポット的な集め方では繰り返しはきかないと思うんです。登録制度や法人会員の問題を真剣に考えていけば、大きな基盤整備になると思いま

警察柔道と明柔



一九六四年度卒 植草 勝

元・千葉県警総務部長

私は昭和四十（一九六五）年三月、曲がりなりにも明治大学を卒業し、柔道を通じての縁あって北海道の実業界に身を委ねた。

しかし、昭和四十二年十月に故郷の千葉に帰り、翌年四月、千葉県警察官を拝命し、平成十三（二〇〇一）年三月に退職するまで、三十三年間、治安の任に当たった。

警察柔道の歴史は、明治十六（一八八三）年一月の「柔術の練習を内達、柔術世話係を採用」（警視庁年表）のころに始まるが、明治十八年から二十一年にかけて行われた警視庁主催の武術大会で、講道館柔道が、柔術の戸塚楊心流との対決で圧倒的勝利を收め、その結果、講道館柔道の名声が決定的になつた。

このことについて、嘉納治五郎師範の談として、「ここに警視庁における試合について特記すべきことがある。それは楊心流の戸塚門下のものと、講

柔術から講道館柔道へ

講道館柔道の強さを目の当たりにした、時の警視総監三島通庸が、明治一二二年、警視庁の武道指導者として講道館の実力者を招聘したのは当然の成り行きと言える。

警察における柔術から柔道への全国的な移行は、講道館柔道の指導者の絶対数や、これまでの柔術との絆などの関係からしばらく時間を要したものの大正元（一九一二）年、警視庁において、「擊劍を剣道、柔術を柔道」に改称したように、講道館柔道の発展と共に着実に切り替わっていくことになる。そして、大学、実業団、教員等と並ぶ一大勢力として、講道館柔道そのものの発展にも大きく貢献する。

学生柔道出身者の警察界への進出

戦後、武道は、連合国総司令部の行政措置による武徳会の解散などで一時

道館のものとの試合であつた。幕末当時の柔術家で、日本第一等強い門家を持つていたのは戸塚彦助であつた。維新後になつてもなお当時の名人が残つており、戸塚彦助本人もまだ達者であり、其後継者の戸塚英美も居つて其手に育てたものの中、なかなか技の秀でたるものがあり、千葉県に本拠を据え、斯道に霸をとなえていたのだ。明治二十一、二十二年頃になつて、講道館の名声が知れ渡るにつれて、警視庁の大勝負となると、自然、戸塚門と講道館の対立することとなる。二十一年頃のある試合に、戸塚門下も十四、五人、講道館からも十四、五人各選手を出したと思う。そのとき四、五人は他と組んだが、十人ほどは戸塚門と組んだ。戸塚のほうでは、業師の照島太郎や西村貞助という豪の者などが居つたが、照島と山下義韶が組み、西村と岩崎法賢とが組み合つた。河合は片山と組んだ。この勝負に、実に不思議なことは、二、三引き分けがあつたのみで、他は悉く講道館の勝ちとなつた…』とある。

的に衰えはしたもの、警察柔道は、当時の関係者の努力によつていち早く復活し、昭和二十一（一九四六）年ごろから各地区で全国的に訓練が再開され、翌年十二月に制定された「逮捕術教範」が契機となつて、逮捕術の直接的な基礎訓練の術技として正式に復活を見た。

昭和二十三年五月、国警本部から、教養課長名で「警察柔道の実施について」が発せられた。その主旨は「警察官の柔道については、逮捕術の基礎訓練としてのみならず、体育として心身の鍛練により明朗剛健な警察官を育成する有力な方策として、各地において現地軍政部の諒解の下に盛んに実施せられ、進んで柔道大会もまた開催せられる状況にあるが、新警察制度発足後においては、国家地方警察官の教育方針に鑑み、平素の訓練に重点をおき、事情の許す限り、前記の目的達成のためこれが励行につとめ、又対抗試合は、警察官の士気を作興するとともに、国家地方警察及自治体警察の融和・協調の増進のためにも適当と認められるので、開催に当たつては、左記の事項に留意の上実施し、あくまで柔道訓練の目的的透徹を期するよう取り計らわれたい」とある。学生柔道出身者が、本格的に警察に職を奉ずるようになるのは戦後のことである。

全国警察における武道は、明治の時代から今日まで制度的にも実態的にも、多少の糸余曲折、浮き沈みはあったものの連綿として警察の表芸たる地位を保ち続けている。

因みに、私の所属した千葉県警では、昭和四十四年度卒の小谷利夫が主席師範として柔道指導にあたつていて、明柔会事務局の記録によれば、戦後、明治大学柔道部に在籍し、卒業後警察界に身を投じた者は五十一名、戦前ではつきりしているのは、昭和十九年卒業の石橋弥一郎先輩のみである。

最後に全国警察柔道選手権で優勝した明柔関係者を掲げておく。

全国警察柔道選手権優勝者（明柔OB）

昭和三十二年度 石橋弥一郎（六段） 福岡県警

昭和四十六年度 坂本 碩正（五段） 熊本県警

昭和五十五年度 河原 月夫（六段） 愛知県警

平成八年度

78kg級 鉄谷 竜三（四段） 警視庁

66kg級 園田 隆二（四段） 警視庁

注・この年より無差別級など六階級制に。

平成十年度

66kg級 園田 隆二（四段） 警視庁

66kg級 園田 隆二（四段） 警視庁

平成十一年度

66kg級 園田 隆二（四段） 警視庁

平成十二年度

66kg級 園田 隆二（四段） 警視庁

平成十四年度

66kg級 園田 隆二（四段） 警視庁

平成十五年度

66kg級 園田 隆二（四段） 警視庁

平成十六年度

66kg級 園田 隆二（四段） 警視庁

明柔会警察関係者

（昭和十九）石橋弥一郎・福岡県警 （昭和二十七）大野忠博・三重県警

（昭和三十二）石崎靖彦・広島県警 （昭和三十三）比嘉良幸・大阪府警

（昭和三十四）黒住大和・栃木県警 （昭和三十七）幕田兼男・警視庁

(昭和三十八) 佐藤幸二・宮城県警 (昭和三十九) 植草 勝・千葉県警
(昭和四十) 上野武則・福岡県警、坂本竜正・熊本県警、小林伸毅・長野県
警、高橋久雄・警視庁 (昭和四十二) 小村和紀・島根県警 (昭和四十四)
小谷利夫・千葉県警 (昭和四十六) 河原月夫・愛知県警、馬庭光伸・島根
県警、近藤孝徳・大分県警、鈴尾貢好・山口県警 (昭和四十八) 飯塚
栄・千葉県警、渡辺光洋・千葉県警 (昭和五十一) 相沢郁夫・宮城県警、
高橋 博・千葉県警、江川真司・三重県警 (昭和五十四) 谷口 淳・愛知
県警、佐藤忠司・栃木県警 (昭和五十六) 山田章弘・愛知県警 (昭和五
十七) 藤戸優治・和歌山県警、正司直樹・山口県警 (昭和五十八) 加藤龍
一郎・千葉県警 (昭和五十九) 矢作和久・千葉県警、古賀 智・佐賀県警、
木村忠光・福岡県警 (昭和六十) 野寄 昭・福岡県警 (昭和六十一) 新
垣 修・沖縄県警 (平成元) 孝富士徳幸・福岡県警 (平成二) 堀越悌
一・茨城県警、石津 剛・山口県警 (平成三) 桑嶋 渡・北海道警 (平
成四) 甲斐 親・宮崎県警 (平成六) 植草 毅・千葉県警、鉄谷竜三・警
視庁 (平成七) 園田隆二・警視庁、山崎浩一・富山県警 (平成九) 井上
智和・警視庁 (平成十) 菅 達也・千葉県警、阿武教子・警視庁 (平成
十二) 高山一樹・警視庁 (平成十二) 野中一平・熊本県警、南波宏行・島
根県警、野寺真史・熊本県警 (平成十四) 棟田康幸・警視庁、宮城充宏・
愛知県警

注・年は卒業年、名の後は所属



昭和46年度全国警察柔道選手権で優勝した坂本竜正

